素描

大技を期待する

北條舒正 ● 信州大学

1968年に“大技で勝負しよう”という雑文のある雑誌に書きました。わが国のお家芸であった柔道も場外すれすれで小技をかけてポイントをかせぎ失敗すれば場外に逃げるというやり方では力と大技でくる外国選手に勝てるはずはない。また、科学雑誌のうち一種類ぐらいは従来の原理よりはみ出した研究のみのものがあっても良いのではないか、しかし実験だけは正確に行なわれていなければならない……といったことを書きました。

中卒、高卒も金の卵ではなくなり、やがて大学も卒業しただけでは評価されなくなる時代がくるでしょう。独創力のある人材養成が必要であります。創造とは何でしょうか、一言ではいえませんが、これは既成概念よりははずれ、はみ出すことではないでしょうか。

入試に引きまわされているような、小、中、高の教育のあり方、大学での現在の教育、研究体制下でこのような人材が生まれ出るのでしょうか？

教育臨調の設置など、教育が急に大きな社会問題になりました。しかし教育制度を変えただけで解決することではありません。人と人との関係が改まらない限りどうにもならないでしょう。

30年ぐらい前ででしょうか、一人の研究者が一生のなかで最も優れた研究をやった年齢が統計的に出されていました。それによると数学、物理は20歳前後、化学は30歳前後だったと記憶しています。高分子も化学と同じぐらいではないでしょうか？優れた研究という点を統計だけから見ると、現在の大学教授からきわめて優れた研究は出ないということになります。若い人々に先生のいうことなんか聞くなといわざるを得ません。

かつては若い人々の人気を取るような発言をすれば拍手喝采を浴びましたが、今ははやりません。

しかし、創造力のある人材養成をするにはどうする

か年寄りが真剣に考え、対処すべき時であります。

創設期には既成のルールがないので勝手なことがやれました。新制大学発足時には教授や他の人々とは無関係に研究ができました。金はなくとも思うようにやれたのは有難いことでした。年がたって講座制のようになると研究費が増え、実験機器も充実して一見大変良くなったように見えますが、研究は教授の意向により大きく左右され、若い人の考えが生かされることはしだいに難しくなったのではないのでしょうか？もちろん若い人がすべて良いとはいえません。年寄りよりもコチコチな考えをもったり、変につっぱって対立しチームの力が出せないところもあるでしょう。先人の仕事の批判はらくです。しかし、研究はそれぞれの時代の研究環境のなかでなされたもので現在と単純に比較すべきではありません。私は優れた研究は優れた人間性のなかから生まれるものと思っています。先人に対する尊敬の念をもたない人物に良い仕事ができるはずはないと思っています。

研究が主体であるべき学会は大学と違って定年制はありません。年寄りが若い人の研究意欲や活動を抑えるようなことをしてはいけないと思います。

長い伝統も誇るべきものが少なくありません。しかし、自然科学の分野では優れた仕事を作り出すのにいかに役立ったかによって評価されるべきです。

本会でも定年制を設けたり、別の部会を作るなどにより、会の運営も若い人に任せ、相談だけをうけるような配慮も必要ではないでしょうか。

古いというだけで若い人の力が発現できないような学会は、これからの社会ではむしろ害の方が大きくなるでしょう。

Nobumasa Hojo, 信州大学 (390 松本市旭 3-1-1) 学長・工博
<略歴> 昭和 20 年大阪大学工学部卒。37 年信州大学繊維工学部教授、56 年より学長。